

金文の「易」字

馬 越 靖 史

本稿では、金文の「易」字を例にとって、金文學の資料やツールを使用し、字釋を試みる一助とする。

金文では「易」は慣用字で、「錫（セキ・シヤク）」「賜（シ）」の原字にあたり、ほぼ「たまう」「たまわる」の意味として使用されている。これについて異論はない¹⁾。ここではまず、金文の用例を見て、そのことを確認しておこう。用例を確認するには、本號掲載の佐藤信彌「金文學のツール」（以下、前稿と略稱）で取り上げている『殷周金文集成引得』やインターネットで閲覧できる『先秦甲骨金文簡牘詞彙資料庫』を利用すればよいが、この場合、「錫」「賜」の原字であることが確定されているので、前者で検索するには「易」の項（一四六九頁、4680）だけではなく、「錫」の項（七〇九頁、2260）と「賜」の項（七二五頁、2340）いずれも當たる必要があり、後者では「全文検索資料庫」をクリックして三つの字を検索する必要がある。なお、前者では「易」の項には「たまう」「たまわる」以外の用例が擧げられており、この意味での「易」字の用例は「賜」の項に集中している。「錫」の項には、「易」の横に「金」と「目」の付いた字の用例が擧げられているが、やはりその字の持つ意味は同じである。用例がかなりの数におよぶが、

用例としていただきたいは、王や諸侯・貴族が自身の臣下に對して、當時の貴重品であった貝（子安貝）・服飾・車馬具・武器・金（銅）・田（土地）などを賜與するとうき、また青銅器を作った者が祖先から長壽や永命、全うな死を賜わらんことを願うときに使用されている。

ただ、現在の人々が「易」という字を見れば、「エキ」と發音した場合「うらない」、「交易」「改易」（かえる、あらためる）という意味を思い浮かべるだろうし、「イ」と發音した場合は「容易」「簡易」（やさしい）という意味を想起するのが当たり前のことだろう。ではなぜ、もともと「易」字が「錫」「賜」の意をもつのか、前述したように金文の用例では確かに明らかなことではあるが、字形から見てそのことが言えるのだろうか。金文もちろん古代漢字であり、漢字が象形性の強い文字であることは改めて言うまでもない。その字がほんらいもつ意味、すなわち原義を考える場合は、字形を検討するのが基本である。そこで、「易」の字形を確認しておこう。次に『金文編（第四版）』卷九（六七〇～三頁、1594）に載せる字形を擧げておく（圖一）。

 <small>小臣 逸蓋</small>	 <small>史 鼎</small>	 <small>小臣 齊鼎</small>	 <small>齊 鼎</small>	 <small>伯 矩</small>	 <small>小子 射鼎</small>	 <small>小臣 采白</small>
 <small>刺 鼎</small>	 <small>玉 鼎</small>	 <small>呂 鼎</small>	 <small>周 尊</small>	 <small>宅 簋</small>	 <small>亞 盃</small>	 <small>王 易 小臣 采 易 在 安</small>
 <small>師 遽</small>	 <small>井 侯</small>	 <small>周 尊</small>	 <small>克 鐘</small>	 <small>岳 簋</small>	 <small>野 簋</small>	 <small>大 保</small>
 <small>楚 尊</small>	 <small>夬 方</small>	 <small>庚 廠</small>	 <small>晉 尊</small>	 <small>叔 鼎</small>	 <small>大 保</small>	 <small>王 錫 貝</small>
 <small>同 白</small>	 <small>鬲 蓋</small>	 <small>保 汝</small>	 <small>晉 尊</small>	 <small>叔 鼎</small>	 <small>大 保</small>	 <small>王 錫 貝</small>
 <small>卣 蓋</small>	 <small>井 鼎</small>	 <small>母 簋</small>	 <small>叔 尊</small>	 <small>叔 鼎</small>	 <small>大 保</small>	 <small>王 錫 貝</small>
 <small>卣 蓋</small>	 <small>井 鼎</small>	 <small>母 簋</small>	 <small>叔 尊</small>	 <small>叔 鼎</small>	 <small>大 保</small>	 <small>王 錫 貝</small>

 <small>大 鼎</small>	 <small>辛 巳</small>	 <small>翰 封</small>	 <small>矢 蓋</small>	 <small>伯 萊</small>	 <small>連 簋</small>	 <small>伯 伯</small>	 <small>元 年 師</small>
 <small>從 血 德 鼎</small>	 <small>齊 蓋</small>	 <small>邦 造</small>	 <small>師 酉</small>	 <small>呂 蓋</small>	 <small>買 簋</small>	 <small>魯 鼎</small>	 <small>師 望</small>
 <small>王 錫 德 貝 廿 朋</small>	 <small>中 作 且</small>	 <small>蔡 侯 歸 鐘</small>	 <small>白 壺</small>	 <small>封 簋</small>	 <small>頤 帶 多</small>	 <small>無 真</small>	 <small>豆 閉</small>
 <small>德 蓋</small>	 <small>鄭 姁</small>	 <small>有 度 不 易</small>	 <small>仲 師</small>	 <small>伯 其</small>	 <small>番 生</small>	 <small>大 簋</small>	 <small>師 金</small>
 <small>弔 德</small>	 <small>師 執</small>	 <small>中 山 王 簠 鼎</small>	 <small>毛 公</small>	 <small>伯 家</small>	 <small>兮 甲</small>	 <small>元 年 師</small>	 <small>師 虎</small>
 <small>蓋</small>	 <small>鼎</small>	 <small>此 易 言 而 難 行</small>	 <small>層 鼎</small>	 <small>父 簋</small>	 <small>父 簋</small>	 <small>元 年 師</small>	 <small>師 虎</small>

さらに、前稿で取り上げたインターネットで閲覧できる『小學堂文字學資料庫』の「金文」をクリックし「易」で検索して確認してみると、こちらは「商代晚期」「西周早期」といった時代区分とともに、當該字の出所、すなわち『殷周金文集成』の著録番號が注記されており、もちろんもとの資料をあたるのにも便利であるが、字形の時代變遷を窺うのにも便利である。

さて、これが「易」字と解釋されてきたのは、上部の半圓形あるいは圓形の内部に點を書いたものがあり、それを『說文解字』の表出字（小篆）、つまり『金文編』の欄外に表出されている題字と比較してみると、酷似している金文の字形があるからである。ただ、ほとんどは點を付け加えない形であり、『小學堂文字學資料庫』で商代晚期とされるものを調べてみると、すべて點のない形である。また、「甲骨文」をクリックして調べてみると、同様の結果である。だから、點はほんらい字形の構成要素ではなかったわけである。

『說文解字』第九篇下易部には「易は、蜥易・蠖蜓・守宮なり。象形。祕書の説に曰く、日月を易と爲す、会易（陰陽）に象るなりと。一に曰く、勿に从うと【易とは蜥易・蠖蜓・守宮（いずれも「とかげ」あるいは「やもり」の意）のことで、象形。祕書の説では易字は日月を合わせた形で、陰陽に象つたものであるという。一説には下半分は勿の形であるという。】と解説がなされている（圖二。大字が撰者である許慎による本文、小字は段玉裁の注）。

圖二（段玉裁『說文解字注』、經韻樓藏版本）

易

易 蜥易・蠖蜓・守宮也。虫部蜥下曰蜥易也。蠖下曰。在壁也。方言曰。守宮秦晉西夏謂之守宮。或謂之蠹。蠹或謂之

九篇下

罟

蜥易其在澤中者謂之易蜥。南楚謂之蛇醫。或謂之蝮。蝮而能鳴。謂之蛤。解按許舉其三者略也。易本蜥。易語言假借而難易之義出焉。鄭氏贊易曰。易之爲名。一而言而三。義簡易一也。變易二也。不易三也。按易象二字皆古以語言假借立名。如象卽像似之像也。故許先言本義。而後引祕書說云。祕書象形。上象首。下象四足。尾甚微。故不象者。明其未必然也。羊益切。十六部。古無去入之分。亦以歧切。今俗書蜥。郭云。蜥音折。是可證。蜥卽蜥。非羊益切。中者謂之易蜥。郭云。蜥音折。是釋文。蜥星歷反。字非羊益切。小雅。胡爲池。蜥。毛傳曰。蜥。蜥也。釋文。蜥星歷反。字非羊益切。說文。引詩。正作蜥。毛語。正與方言。含方言。易蜥。南楚謂之蛇醫。或謂之蝮。蝮。謂在澤中者也。蝮卽虫部之蜥。字。蛇醫也。陸璣云。蜥一名蝮。蝮水蜥也。或謂之蛇醫。如蜥易。然則蜥易者。統名倒言。易蜥及單。祕書說曰。日月爲易。祕書謂言蜥者。別其在澤中者言也。祕書說曰。日月爲易。祕書謂部亦云。祕書。瞋从戌。按參同契曰。日月爲易。剛柔。象。会易相。當。陸氏。德明。引。虞翻。注。參。同。契。云。字。从。日。下。月。象。会。易

也。謂上从日象陽。下从月象陰。釋書說字多言形。而非一其義。此雖近理。要非六書之本。然下體亦非月也。曰从勿。又一說。从旗。勿之勿。凡易之屬。皆从易。文一

『説文解字』の撰者である許慎は、「易」とは「とかげ」「やもり」といった動物の象形字であると解しているが、別説として、字形は太陽と月を合わせたもので陰陽に象つているという祕書（緯書）の説と、下半部は勿の形（柄に三本の幟が付いた「旗」の形。『説文解字』第九篇下勿部を参照）だという一説を擧げている。上半部は小篆では日の形に見えるが、下半部は月の形でないことは明らかである。確かに形としては小篆の勿に見えるが、日と勿を合わせた字形で、その原義が何であるかは記されてはいないので分からない。

段玉裁の注に「上は首に象り、下は四足に象る、尾、甚だ微なれば、故に象らず」という。とかげもやもりも四本足であるが、もし古代人がその形を見て造字するとすれば、現在でも「トカゲのしっぽ切り」という言い回しがあるように、特に目立った長い尻尾をも字形に反映させるだろう。ともあれ、小篆よりさかのぼる金文の字形では、さきの『金文編』を見ても分かるように、動物の象形字には見えるもののごくわずかでしかない。では、もとの形と意味がどういふものであったのか、こういう場合、前稿で取り上げた『金文詁林』や『金文詁林補』を紐解くこととなる。ここでは、『金文詁林』に引用された郭沫若の説を擧げておく（圖三）。

圖三

<p>郭沫若曰「易」字作益(𠄎)可以看出出易字是益字的簡化但易字在殷墟卜辭及殷彝銘中已通用其結構甚奇簡當為象意字迄不知所象何意今其繁體字乃發現于周初銅器銘文中豁然可見其簡化的痕迹由此可見周人文化早傳自殷而殷人已在此進行漢字的簡化殷墟文化之前必然還有更長遠的歷史是毫無疑問的</p>	<p>益乃溢之初文象杯中盛水滿出之形故引伸為增益之益益字既失其本義後人乃另創溢字以代之這是漢字由簡而繁的一種過程</p>	<p>者多之但由益(𠄎)而易(益)的變化如無值器出現三千多年來已失傳無人知道它們本是一個字這是漢字由繁而簡的一種過程目前猶有不同意見漢字簡化的人以為違背六書的規律把形音義的系統破壞了這是在所難免的苟便於事則不必一定要拘守舊規請看由益而溢不是在三千多年前的古人已把形音義系統都破壞了嗎(文史三四五頁至三四六頁由周初四德器的考釋談到殷代已在進行文字的簡化)</p>
--	--	--

5873(9.419-1284)

5872(9.418-1284)

郭沫若は「益」(𠄎)の簡體字で、「益」の字形を杯のなかに水をいっぱい注いで溢れ出るとし、もともとの意味は「あふれる」で「益」の原字とみなす。これは、『説文解字』第五篇上皿部に載せる「益」

字の小篆「益」の形(段玉裁『說文解字注』、經韻樓臧版本)、つ

まり皿の上に「水」字が横たわる形から来ている。また郭氏は溢れるという意から増益の意が派生し、さらに賜與の意(持っているものが持っていないものに所有させ、持っているものにはさらに多く所有させる)が派生したとする。「易」の字形はつまるところ、「益」の字形から杯の取っ手の部分と液體の部分だけを取り出したものである。

類似の説は郭氏以前、すでに陳夢家が唱えている。ただ、『金文詁林』には陳氏の説は収録されていないし、『金文詁林補』には白川靜の説(林潔明による中國語譯『金文通釋』)のなかに引用されているが、陳説の出所が示されていない。そこで、白川靜のオリジナルの『金文通釋』を調べてみよう(以下『通釋』と略稱)。その巻七には「金文通釋索引」と「金文通釋本文篇索引」とが附されており、金文本文を引くことができるのは後者である。これも金文の用例を調べるための一字索引で、例えば「一」を引くと、「一人」「一夫」「一方」など、熟語によって用例が分類配列されていることもあり使い勝手がよい。ただし、『通釋』が扱っている金文は一九七〇年代後半までであること、「易」のような慣用字は「省略」として用例を記載していないことから、前掲した用例を調べるツールを併用する必要がある。

後述するように「益」とされる字の見える金文は、「徳」という青銅器製作者の諸器であるから、「金文通釋本文篇索引」の「II 人名索引」の項で「徳」(十五畫)を引いてみると、「徳 53, 54, 54a」とある(圖四)。

圖四

人名索引 297	
213①, 215(2), 217(4), 218 a	鄒叔姬可母 212 a
齊良 213 f	鄒子 212 h, 212 i
齊桓姜 213 h	鄒子靈白 212 h
齊辟寧叔 216	鄒子款 212 i
齊辟寧叔之孫 216	鄒 208 c
齊寧氏 216 a	鄒孟鳩 208 c
齊寧氏之孫□ 216 a	嬭 212 c
齊侯女圖 217	嬭蘇 211 ①
齊湫曼 218 c	嬭虎 224 c
齊敳姬 213 ②	嬭侯 224 d
齊寧姬 213 ③	嬭蘇 224 d
齊寧姬之嬭 213 ③	嬭中 224 d
齊叔姬 213 ④	蔡侯 212 b(2), 212 c, 212 f, 212 g, 212 ②(2), 212 ③(2), 212 ④
鄭氏 194(2)	蔡侯 212 c,
鄭 77	212 f, 212 g
(十五畫)	212 f, 212 g
盟 10 g, 184(2)	蔡侯□ 212 c
齊女 補13	蔡侯 212 e
齊奚 補13	蔡侯 212 ③(2)
寬兒 200 j	蔡侯朱 212 ④
齊 補17 f	蔡子□ 212 b
剛野 補11 g	蔡公子加 212 ①, 212 b
慶叔 220 f	蔡公子果 212 ①
慶癸 補11 a	蔡公子□ 212 b
齊公 208 b	蔡姬 126 b,
齊白 35	126 c, 212 ②
徳 53, 54, 54 a	蔡姑 212
徳父 139	蔡姑□ 212 ⑤
徳克 172 ①	蔡改 211 ①
徳尹夷姬 212	趙 補13(3), 55(2)
徳叔 補10 a	趙公 211 a
鄒叔姬 212 a	戴公子、叔暹 211 a
	戴侯 211, 211 b, 211 c, 211 ①, 補14 b
	戴白駁 211 e
	戴白駁之子白元 211 e
	戴子 211 d
	戴子 211 d
	戴生奉 211 f
	戴 93 a(3)
	榮子真補 210 ③
	蘇 補5
	蘇公 51 c
	蘇侯 51 b, 51 c
	蘇白 49(2)
	蘇中 51, 51 a(2)
	蘇姬 51 a
	蘇妊 51 a, 51 b
	蘇媯 51 a
	欽璋 227 g
	設 191 ②
	璋 218 h
	魯婦 90 a
	盤然 227 k
	賓 120(2)
	號 191 ③
	號大子元 200 d
	號白 200 d
	號中 144, 144 a, 200 e, 200 h,
	補11 d
	號叔 155,
	155 a(7),

數字あるいは數字＋アルファベット小文字は、『通釋』巻七に収められた金文(金文通釋本文篇)の通し番號で、㊦は叔德設(簋)、㊧は德方鼎、㊨は德鼎と德設(簋)であることが分かる。ただここには金文本文のみが掲載されているだけなので、通し番號から『通釋』の白川の釋讀本文を調べる必要がある。ページの左端を見れば、いずれも巻一下に収録されていることが分かる。陳説は㊦叔德(德)設(簋)の釋讀のなかに引用されている(五六三頁)。しかし、當該箇所には出所は記されていない。『通釋』では、各金文の釋讀の冒頭に「考釋」として諸學説の出所がまとめて記されている。㊦叔德設(簋)の「考釋」の項を見ると、「斷代・二・一〇八」とあり(圖五)、これが陳説の出所である。「斷代」とは、陳夢家の「西周銅器斷代」という論文の略稱で、『考古學報』という學術雜誌に連載されたものであり、「二・

一〇八」というのは、第二集一〇八頁の意である。第二集は『考古學報』第十冊（一九五五年）に掲載されている。⁽⁴⁾ その一〇八頁以降に陳氏の叔德（徳）殷（簋）に對する釋讀が記されており、「益」に關する解釋は一〇九頁から始まる。

圖五

五三、叔德殷

時代 成王斷代・郭沫若
 收藏 「福格博物館」斷代
 著錄
 器影 斷代・二・圖・一七、一八
 文物・一九五九七二 文史論集・
 圖版三
 銘文 斷代・二・一〇九 文物・
 一九五九・七・二
 考釋 斷代・二・一〇八 文物・
 一九五九・七・一 郭沫若 由周初
 四德器的考釋談到殷代已在進行
 文字簡化文物・一九五九・七 文史論
 集（一九六〇）再錄



叔 德 殷

五六一

陳氏によれば、この字は水が皿から溢れ出るさまに象っており、皿の下部の圈足（高臺）に象る部分を取り去れば、金文の「易」字となり、「益」のほうが古式で、水が溢れ出るといふことから、「増益」「増

加」の意をもつとする。

「益」とされる字はさきの『金文編』の末尾に収録されて確認できるが、出所となった資料は『金文編』やさかのぼって閲覽した陳氏と郭氏のものとの論考にも載せられているように、徳鼎・徳簋・叔德簋の銘文である。さきの『小學堂文字學資料庫』で現在汎用される著録集『殷周金文集成』の著録番號を調べると、それぞれ2405・3733・3942であることが分かる（いずれも時代は西周早期）。ここでは徳鼎の銘文を擧げておく（圖六）。

圖六



02405

王 賜 徳 貝 廿 朋
 用 乍 (作) 寶 尊 彝

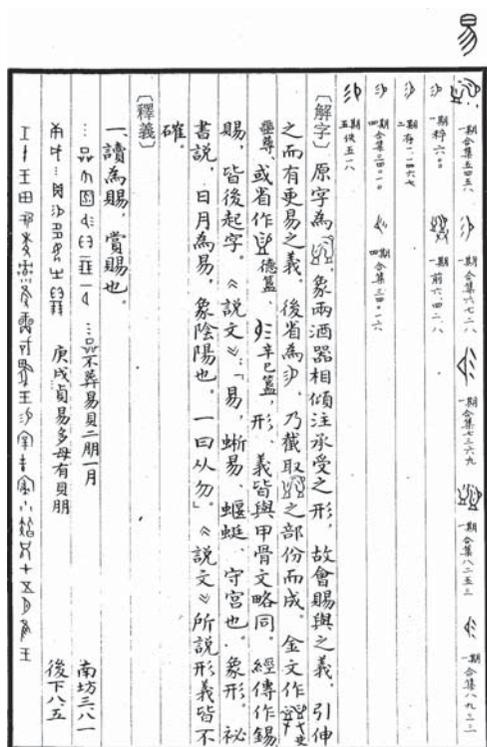
「益」とされる字は右の行の第二字目に見える。意味は、「王が徳（人名）に貝二十朋（朋は貝を數える單位）⁽⁵⁾をたまわったことを記念して、徳は先祖を祭るために宗廟に安置する寶器を作った」ということであ

る。他の徳簋は徳鼎と同じ文章で、「益」とされる字は「𠄎」と書かれ、鼎のそれとほぼ同形で記されている(やや傾斜がきつい)。また、叔徳簋は「王が叔徳に男女の奴隸(?)十人・貝十朋・羊百匹をたまわった」ことを記しており、「益」とされる字は「𠄎」と書かれていて、器の中から液體が溢れ出ているさまが一層表現されているように見える。以上三器と同じ製作者だと思われる徳方鼎(『殷周金文集成』2661)には、「王」「徳貝廿朋」「王、徳に貝二十朋を」「」とあり、ここでは「益」字ではなく「易」字が使用されていることから、兩字はほんらい同じもので、「易」は「益」の簡體とも言えそうである。

ただ、「益」とされる字を「たまう」の意味で使用する事例は上に挙げた三器のみで、そのことからだけでも陳・郭兩氏の説に對して反駁する者がいるのは、『金文詁林』『金文詁林補』で確認できる。例えば、『金文詁林』所載の嚴一萍の説では、徳鼎の「益」字は「錫(易)」の假借(當て字)で、偶發的な現象であり簡略化されたものではないとし、甲骨文中「易日」という語が現れ、この「易」を『説文解字』第七篇上日部の「暘、日覆雲暫見也【暘は、日、雲に覆われ暫くして見れるなり】」の「暘」字とする。つまり、「晴れ」の意で、「易」の字形を雲が開いて顔を覗かせた日と下に向かって射しこむ日光の象形とみなすものである。そして、古代では「易」字は横の線が一本多い「易」字、すなわち「陽」と同じものとする。張光裕は甲骨文の「易」字と「益」字には用法の點ではっきりとちがいがあり、「易」字の三つの小點が下向きなのに對して、さきの徳鼎に見える「益」字のそれ

とは書き方が異なるとして、兩字は別なものであり、徳鼎などの「益」字は「易」字の假借(當て字)だとする。ここで目を轉じ、さかのぼって甲骨文中の「易」字を見てみよう。甲骨文各字を調べる上で有用なのが、徐中舒主編『甲骨文字典』⁶⁾である。最初に甲骨文中の字形をいくつか表出し、次に字形の分析とそこから得られる原義、その次に甲骨文中どのような意味で當該字が使用されていたかを用例とともに記している(圖七)。

圖七



介祀彤日 六祀彤日 士于王田于麥麓隻高哉焉王易宰手假小錦兒在五月佳王	伏五八
二用牲法 貞易積白九月	前六四二八
三讀如賜 賜日即陰天 郭沫若說殷契粹編考釋七頁	
辛巳王步于西易日	合集五〇〇
存二八	
續四四四	
四地名 貞于易 前六四二	
五疑為更易之義 齒易 猶言換牙 參見楊樹達積微居甲文說釋易	前四四二
十白十解 貞于易 甲子十殷貞王于齒亡易	前六三二
易日庚申明 王來途首雨小	乙六四九

これによれば、原字は「𠄎」であり、二つの酒器が傾いて注ぎ受けあう形に象っている。だから賜與の意味にあて、そこから派生して更改・改易の意味が生じた、のちに「𠄎」と省略されたが、これは「𠄎」の一部を切り取ってできたものであるという。つまり、「𠄎」字の右側の器形の取っ手の部分と液體を表す線状の部分だけを取り出した字が、「易」だということである。甲骨文には別に、片方の器を両手で捧げ別の器に液體を注ぎ流す字形（）、「」（『甲骨文合集』28012）や、一部が缺けてはいるものの片手が取っ手の附近に置かれている字形（）、「」（『英國所藏甲骨集』477）が見られ、とりわけ後者の字形から考えると、取っ手の附いている器から液體をもう一つ

の器に注ぐという意をほんらいは表したのだと考えられる。「注ぐ」わけだから、上から下に向ってなされるはずである。そこから上位の者が下位の者に對して「あたえる」「たまう」という意味が派生したということとは十分に考えうる。

注ぐ側の省略形が「易」字ならば、注がれるほうは器の液體の量が増し溢れ出るさまを表しているわけだから、「益」字にあたると考えられる。すなわち、「易」と「益」はもともと一つの字を構成するパーツであったのであり、二つの字として分化していったのではないかとみなすこともできる。甲骨文には「𠄎」・「𠄎」・「𠄎」・「𠄎」(益)三字がそれぞれ存在し、用法も一致しないことから、甲骨文内においてはほぼ別字として扱われていたのであろう。

甲骨文で「たまう」という意として使用されているのは、数は少ないが「𠄎(易)」字である。『甲骨文字典』では、「不葬、易貝二朋。一月(南坊三・八一)、「庚戌：貞、易多女出(有)貝朋(後下八・五〓合集二438)」という用例が掲げられており、これらは文章が記されるようになる殷代晩期の金文よりさかのぼるもので、いわゆる「甲骨文第一期(武丁期)」とされる卜辭である。前者は最初の句は意味詳だが、次は「貝二朋を賜うのはいかがでしょうか」、後者は庚戌の日に「女性集團に賜與を行い貝「一」朋を持たせるのはいかがでしょうか」と神に問い訊ねる意であって、確かに「たまう」の意として使用されている。

『甲骨文字典』によれば、史噩尊という青銅器の銘文に「」という字があるという。史噩尊は『殷周金文集成』では器號3960で(器

名は史喪尊、やや判讀しづらいが次に挙げておく(圖八)。

圖八



05960

事(史)噩乍(作)丁
公寶彝,其永賜

銘には「史噩乍(作)丁公寶彝孫子永𠄎」【史噩、丁公の寶彝を作る。孫子、永く賜らんことを】と記されている。前掲した『殷周金文集成引得』の「賜」の項を引いて調べてみると、金文の用例、例えば「用賜永壽【用て永壽を賜はらんことを】」(7,4040)、「用賜眉壽・黄耆・靈(靈)冬(終)【用て眉壽・黄耆・靈終を賜はらんことを】」(8,4039,40)などから、「𠄎」字の下には長壽・永命・よき終わり(全うな死)を表す語が省略されていると解せそうで、銘文全體の意としては、「史噩なる人物が丁公という先祖に祭祀するための寶器を作る、それによって子孫に至るまで永遠に先祖から長壽や永命、よき終わりを賜わりますように」ということだろう。

翻って、さきの德諸器に記された「𠄎」「𠄎」「𠄎」「𠄎」字は取っ手の附いている器に液體が満ちている形だが、「𠄎」の字形が示すように、ほんらいは他の器に水や酒などの液體を注ぐさまを表したもので、郭沫若や陳夢家のように「益」と釋するよりは、「易」と釋し、「𠄎」はそのさらなる簡化あるいは省略形で、原義は「注ぐ」、それから派生して「あたえる」「たまう」の意が生じたともみなののが今のところよいと筆者は考える。

なお、近年世に公になった殉墓には、「公𠄎」𠄎 刎貝十朋【公、刎に貝十朋をたまふ】という句があり、趙平安は「𠄎」字をその注ぎ口を強調した字形から、「𠄎」と名づけられる青銅器の象形字とし、德諸器の「𠄎」「𠄎」「𠄎」とともに「𠄎」字で、「𠄎」は取っ手の部分と液體を省略したもので、「𠄎」は「𠄎」から分化した字形だと見る。¹⁰⁾しかし、趙平安も指摘しているように、「𠄎」という青銅器が西周中期から出現することから考えると、西周早期とされる德諸器および殉墓にその象形字が記されるというのは解しがたい。

前稿の末尾にもあるように、金文など出土文獻・文字の解釋は新資料の出土・公刊によってその都度考え直す必要が生じるのであり、新資料やそれに基づいた新説に對して常に氣を配る必要がある。絶えずアンテナを張って情報を受信し、新たな解釋を模索する姿勢が肝要なのである。

註

(1) 例えば王文耀編著『簡明金文詞典』(上海辭書出版社、一九九八年、

- 一九五頁）を参照。
- (2) 由周初四德器的考釋談到殷代已在進行文字的簡化（『文史論集』、人民出版社、一九六一年。原載は『文物』一九五九年第七期）。
- (3) 『白川靜著作集別卷金文通釋』（平凡社、二〇〇四年）（五年）（五年）。なお、『通釋』はもとと神戸の白鶴美術館から發行された『白鶴美術館誌』（一九六四年に始まる）に專著の形で連載され、のち白鶴美術館により單行本（卷一〜七、全九冊、卷七は一九八四年發行）として發行され、さらに平凡社によって『白川靜著作集別卷』に収録・發行されたものである。
- (4) 『西周銅器斷代』はのちにまとめられ單行本として發行されている（例えば、中華書局、二〇〇四年版）。
- (5) 數の單位としての「朋」については、齋藤加奈「芻蕘」（『漢字學研究』第二號、二〇一四年、七五頁）を参照された。
- (6) 「釋分」（『中國文字』四十冊、一九七一年）。
- (7) 「先秦泉幣文字辨疑」（『中國文字』三十七冊、一九七〇年）。
- (8) 四川辭書出版社、一九八八年、一〇六三〜六四頁。なお、甲骨學の資料やツールについては、末次信行「甲骨學の工具書案内―甲骨學論著引用卜辭をめぐって」（『漢字學研究』第二號、二〇一四年）を参照されたい。
- (9) 張光裕「芻蕘銘文與西周史事新證」（『文物』二〇〇九年第二期）。
- (10) 『芻蕘』銘文在文字演變上的意義（『金文釋讀與文明探索』、上海古籍出版社、二〇一一年。原載は『出土文獻』第一號、二〇一〇年）。芻蕘の「𠄎」字の解釋については、注5齋藤加奈論考（七三〜七四頁）も併せて参照されたい。

（立命館大學白川靜記念東洋文字文化研究所客員研究員）